大田市周辺における万寿大津波に関する記載資料と現地視察報告

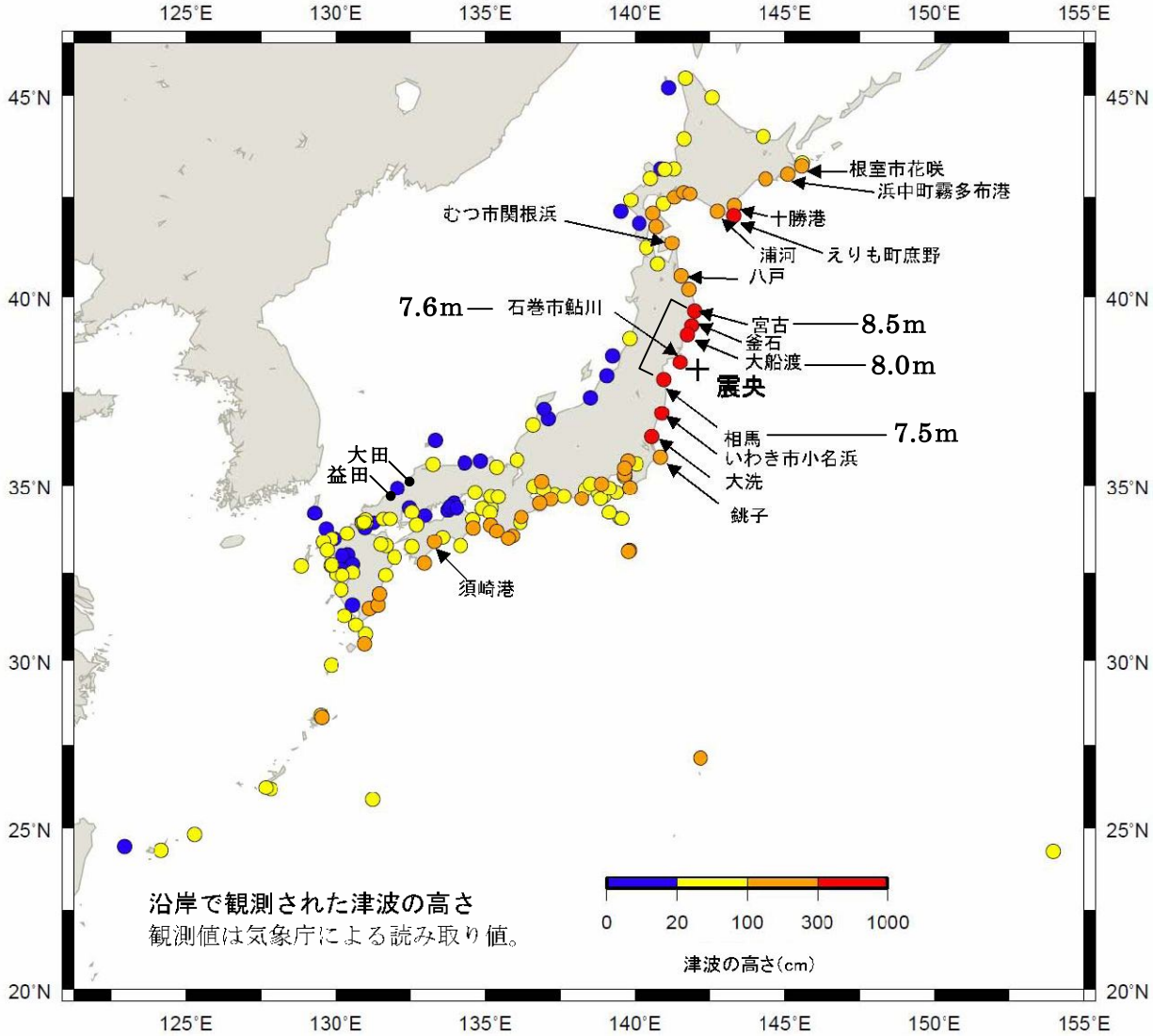
畑　和宏

1. はじめに

益田地域には、万寿３年の津波に関する文献記録が多数残されている。この津波の高さは 10～20mとの記録もあり、このような規模の津波が、益田の沿岸部に襲ったのであれば、益田から約 80 キロ離れた大田市周辺にも、大津波が押し寄せていても不思議ではない（図 1：昨年の東北地方太平洋沖地震による津波の規模と範囲，大船渡―宮古間、石巻―相馬間はそれぞれ約 80 キロ）。

そこで、津波研究会のメンバーのうち、筆者ら大田市在住者を中心に、大田市周辺で、万寿の大津波に関する記載が残っていないかを調べるとともに、研究会のメンバーと文献資料に記載されていた場所を視察した。本稿では、これらの調査結果をご報告する。

図 1　平成 23 年東北地方太平洋沖地震による津波の高さ（気象庁資料に加筆）



痕跡等から推定した津波の高さ	観測点名	推定した津波の高さ	観測点名	推定した津波の高さ
	八戸（青森県）	6.2m	大船渡（岩手県）	11.8m
	宮古（岩手県）	7.3m	石巻市鮎川（宮城県）	7.7m
	釜石（岩手県）	9.3m	相馬（福島県）	8.9m

2.文献調査

大田市内の公民館、図書館で閲覧可能な町史に関する資料を調査し、万寿の大津波に関する記載の有無を調べた。調査の結果は、表１に示すとおりである。

この中で、万寿の大津波もしくは、それに関連している可能性のある記載を確認できたのは以下の資料である。

表１　大田市周辺における文献・資料調査結果

文献・資料名	著者・編集者他	発行年月	万寿の津波に関する記載	記載内容
大田市誌	―	1968年11月	無	―
鳥井町史誌	細田弥三	1977年10月	有	P.277　万寿3年（1026年）石見海岸を襲う大津波があった。鳥井の惨害は実に甚だしいものがあった。・・・・・ 静間川は、川尻を流止から鷺巣海岸へ変えた。
仁摩町誌	―	―	無	―
温泉津町誌　上巻・下巻	―	―	無	―
五十猛の歴史と民話	林　正幸	―	有	P.75　万寿3年(1026年)大波が大屋辺りまで押し寄せ、地名に小鯛ヶ迫（小さな鯛が津波で押上げられていた）がある。
五十猛歴史年表	長尾柳作	―	有	万寿3年　（1026年）大津波石見海岸を襲う。
２２世紀の君たちへ 久手は真秀ろば ―聞き書き町民の歴史―	宮脇治正	2000年6月	有 記載内容は「式内社の研究：志賀剛」より引用か？	P.12、苅田神社、万寿3年の「寅の大洪水」で山が崩壊、社殿が流出したため移築。
苅田神社と寅の洪水 「歴史地震の研究」 ふるさと紀行	森井晃一	―	有 記載内容は「苅田神社縁起」より引用か？	万寿3年寅の洪水といわれる、前古未曾有の大水害あり、山は崩れ、谷は裂け、波根湖が大氾濫しました。当社の本殿、・拝殿・楼門・回廊はじめ末社等悉く漂流しました・・・。
ふるさと読本 鳥井町 静間町 五十猛町 長久町	西部ブロック推進協議会	2005年3月	五十猛町―歴史年表に記載有り	P.132　万寿3年　（1026年）大津波石見海岸を襲う。
			長久町―地名の由来に船越坂と鯨橋の記載有り	昔、津波が押し寄せたとき、鳥井にあった舟がこの峠道を越えたことによると伝えている。又、船と一緒に鯨も流されてきたそうで、坂のふもとの小さな川に架かっている橋をこのため「鯨橋」と呼んでいます。
			静間町―名所・旧跡の静之窟の説明文に右の記載あり。また歴史年表欄には、1656年、大津波で魚津浦の静之窟にあった、静間神社破損と記載有り。	江戸初期には、この洞窟あたりには、滝の前千軒という集落があったが、1656年に大津波があり、一瞬にして海中に没したと伝えられている。
			鳥井町―歴史年表に記載有	P.21　万寿3年(1026年)石見地震による大津波が石見海岸を襲う。静間川は、川尻を流止から鷺巣海岸へ変えた。この時、舟越、鯨橋の称起こる。
式内社調査報告(21)	式内社研究会編	―	静間神社について右の記載あり。万寿3年の津波に関する記載無し。	P. 828　1674年6月27日の大洪水のため、山崖崩壊し、社殿破損の故に五町ばかり離れた現社地へ再遷座した。

大田市の沿岸部は、東から波根町、久手町、鳥井町、静間町、五十猛町、仁摩町、温泉津町と続く。各町ごとに津波に関する記載の概要を以下に記す。

●波根町-----津波に関する記載は、いまのところ確認できていない。
●久手町-----苅田神社（建立 895 年以前）の記録において、万寿 3 年の寅の大洪水（大水害）で山は崩れ、谷は裂け、当社の本殿、・拝殿・楼門・回廊・末社等が漂流とある。
●鳥井町-----鳥井町誌には、万寿 3 年（1026 年）石見海岸を襲う大津波があり、鳥井の惨害は実に甚だしいものがあったとあり、その時、静間川は川尻を流止（現在の河口から約 2 キロ西）から鷺巣海岸（現在の河口から約 1 キロに西）へ変えたとある。また、津波が押し寄せたとき、鳥井にあった舟が長久町境界部の峠道を越えたため、その坂を舟越坂（ふねんござか）と呼ぶようになったと伝えられている。
●長久町-----舟越坂（ふねんござか）の記載はある。
●静間町-----万寿 3 年の津波の記載はない。ただし、「静の窟」の案内板には、江戸初期、この洞窟あたりには、滝の前千軒という集落があったが、1656 年に大津波があり、一瞬にして海中に没したと記されてある。
また、式内社調査報告（式内社研究会編）には、静間神社（886 年建立）が 1674 年 6 月 27 日の大洪水のため、山崖崩壊し、社殿破損の故に五町ばかり離れた現社地（高台）へ再遷座したとある。
●五十猛町---万寿 3 年(1026 年)大波が大屋辺りまで押し寄せ、地名に小鯛ヶ迫（小さな鯛が津波で押上げられていた）がある。
●仁摩町-----町誌には津波に関する記載はない。津波に関する言い伝えもない。
●温泉津町---町誌には津波に関する記載はない。津波に関する言い伝えもない。

以上のように、大田市周辺でも、津波、洪水、水害など表現は異なるが、万寿 3 年に水に関する自然現象で、建造物や地形に異変が生じたことを記す資料が存在することは判明した。ただし、温泉津町、仁摩町などの沿岸部では津波、水害などの記載がないこと、静間町では、万寿 3 年（1026 年）の記載ではなく、それとは別に 1656 年の津波とか、1674 年の大洪水の記録が残っているなど、記載の有無、記載の相違、そして、記載内容にも地域差があることが判明した。

3. 現地視察及び聞き取り調査結果

前述の記載資料の中から、「静之窟と静間神社の移築」、「舟越坂や小鯛ヶ迫という地名」、「静間川の河口の変化」、「苅田神社の移築」に関して、現地視察及び聞き取り調査を行った。その結果を以下に整理する。

■静之窟と静間神社

現地視察では、静間神社の総代長であり郷土史家の石川勝典氏に同行いただき、解説を頂いた。

石川氏曰く、静間神社（886 年建立）は、1674 年まで魚津の浜辺近くにあった。しかし、1674 年 6 月 27 日の大洪水で、山崖崩壊し、社殿が破損したため、その後、現社地へ再遷座したとのことである。神社の記録や伝承には、万寿 3 年の津波のこと、案内板にある 1656 年の大津波のことは記載されていないとのご説明があった。

今の魚津地区は、背後に急崖が迫った地区である。もし、1026 年に大津波が押し寄せていたら、津波高さに加え、その遡上高さは著しいものとなり、建造物は壊滅的な打撃を被ったものと考えられる。にもかかわらず、魚津の浜辺にあった静間神社には、その記録が残されていないのはなぜだろうか。

図 2　静之窟近くの案内板

なお、案内板にある、滝の前千軒という集落について、石川氏は、1656 年に集落に何かが起こったとするならば、それは大津波ではなく、大しけや高潮もしくは山崩れなどの影響ではないかと述べておられた。

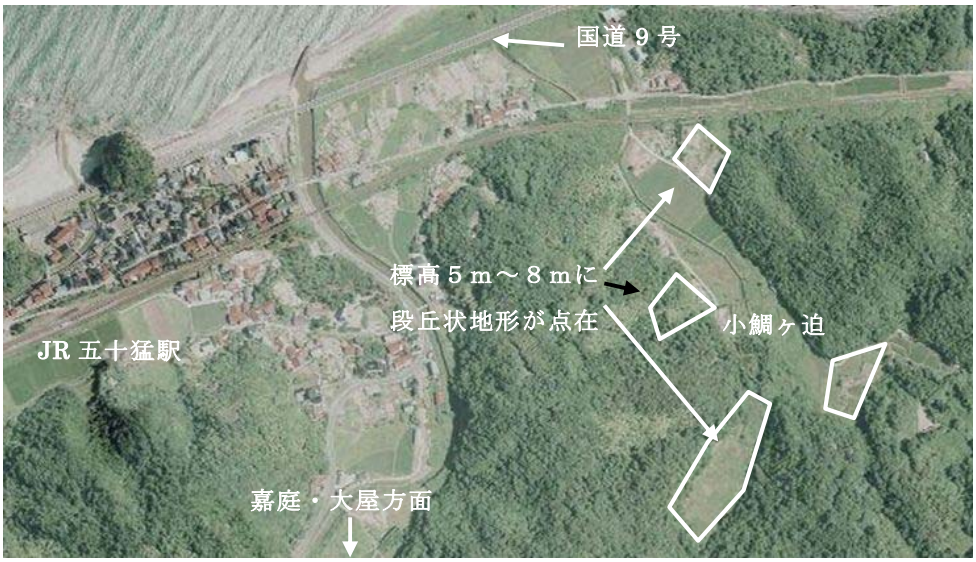
図 3　静之窟と静間神社周辺の空中写真（島根 GIS）

■舟越坂や小鯛ヶ迫という地名

五十猛町の「小鯛ヶ迫」という土地は、図 4 の写真の位置にある。「迫」は谷の行き詰まりの地形をさすが、当該地も海岸に近くの奥行きの浅い谷で、側部そして、谷の行き詰まりに小さな段丘状の土地が点在している（標高 5m～8m の位置）。五十猛の歴史と民話（林正幸著）には「万寿 3 年(1026 年)大波が大屋辺りまで押し寄せ、地名に小鯛ヶ迫（小

さな鯛が津波で押上げられていた）がある」と記載されているが、津波によって、そのようなことがおこりうる地形ではある。ただし、大屋（大田市）辺りまでとなると、五十猛と大屋の境界で地形標高 50m の高さに達するため、「辺り」がどこをさすのか、その点が不明である。

図 4　JR 五十猛駅付近の空中写真（島根 GIS）



「舟越坂（ふねんござか）」と言う地名は、図 5 に示す鳥井町と長久町との境に位置する峠坂をさす。この地名は、大田に暮らしていると、よく耳にする地名ではあるが、万寿の大津波によって舟が峠を越したという言い伝えがあることを知っている人は少ないようである。現在は、切土による県道が整備されており、県道の頂部の標高は約 40m である。また、海岸から頂部までの距離は約 1 キロである。

ほんとうに、舟が峠を越したのか、それとも、鳥井側の峠のふもとまで流されてきただけなのか、定かではないが、現地の地形を見る限り、もし、峠を越えたのであれば、巨大な津波であったといえよう。

なお、図 5 に図示した長久町側に野井神社（792 年建立）がある。1026 年に峠を舟が越すような津波が押し寄せたなら、神社にもなんらかの影響がなかったものかと、朝倉績氏（宮司）に聞いてみたが、そのような記録は残されていないということである。

図 5　舟越坂周辺の空中写真（島根 GIS）

■静間川の河口の変化

鳥井町史誌には、図 6 に示す、静間川河口の平面図が添付され、本文には、以下のような文が記載されている。

-----静間川が、流止で日本海に注いでいた上古には、その下流に近い、大平台地の西麓から海に注いでいたが、万寿 3 年の石見海岸を襲う、大津波のため、川口を鷺の巣の下にかえた。もとの川口は埋められ、鳥井一体は、沼地と化し、その一部が東池として残ったとのことである。-----

なお、上記の出典、及び、根拠は定かでない。

また、本文には、延宝 2 年（1674 年）銀山川洪水で、川口を鷺の巣から

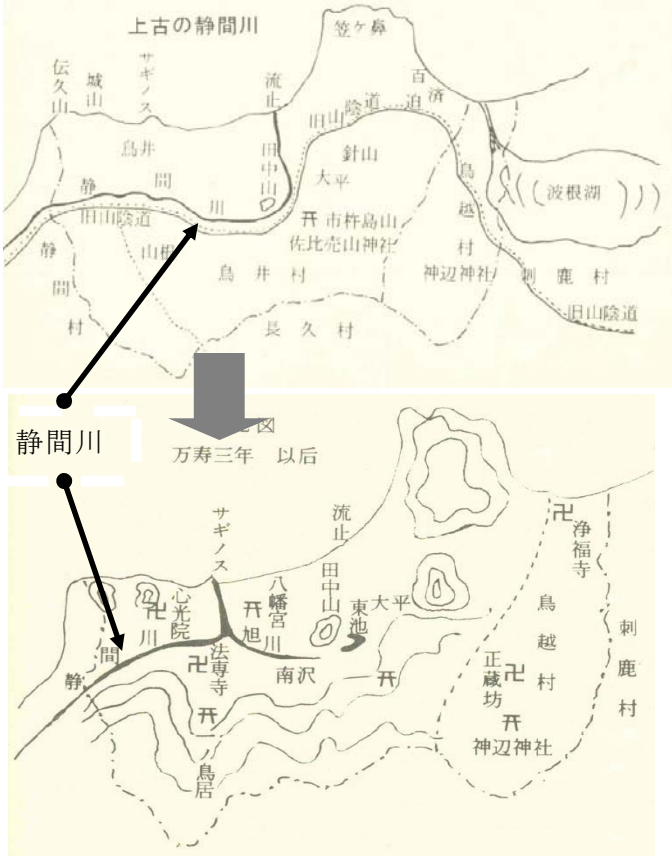


図 6　鳥井町史誌よる静間川の河口位置の変化　（平面図は鳥井町史誌より抜粋加筆、空中写真は島根 GIS に加筆）

さらに城山の西に変化させたと記載されている。この 1674 年は、式内社調査報告（式内社研究会編）にある、静間神社が洪水により社殿破損した時にあたる。

■苅田神社の移築

図 7 に苅田神社の位置を示した。記録には、895 年には神谷山の烏帽子端（えぼしばな）という大巌石の上に、既に御鎮座になっていたといわれ、創建の時は更に遠い以前のことと思われる。その後、万寿三年寅の洪水といわれる、前古未曾有の大水害があり、山は崩れ谷は裂け、波根湖が大氾濫し、当社の本殿・拝殿・楼門・回廊をはじめ末社等悉く漂流したが、幸い御神体の内二体が、矢代柳の大樹にかかって、それを奉遷することが出来たと記録されている。

図 7　苅田神社の位置図

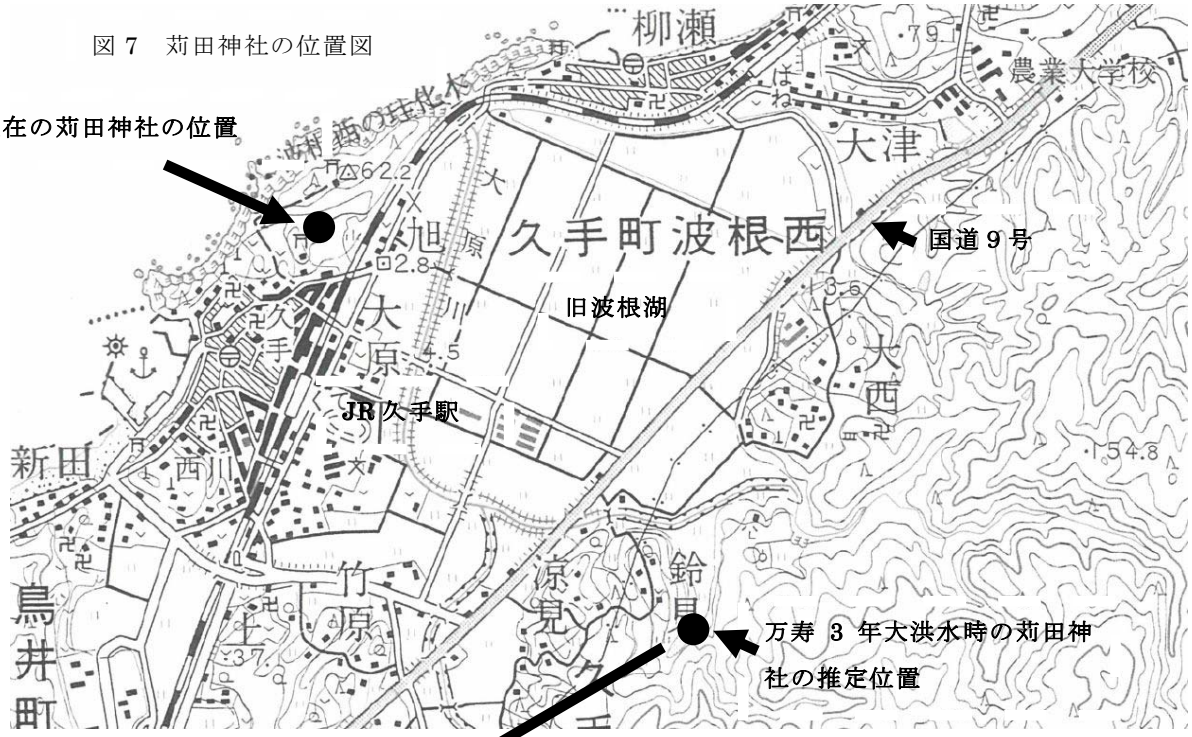


図 8　神社の推定位置

※標高 10m～20m

※現在の波根海岸から約 2 キロ

※波根湖の湖岸

図 9

道路計画に伴う

遺跡調査用のトレンチ

表１に紹介した、２２世紀の君たちへ・久手は真秀ろば―聞き書き町民の歴史―（宮脇治正編）では、万寿３年の大洪水は、万寿３年の大津波のこととして記載されている。ならば、波根湖周辺全域において、津波による被害が大きかったものと思われる。

なお、現地視察で当地を訪れた際、道路計画に伴う、遺跡調査のためのトレンチ（深度GL-1m程度）が掘削されていた（図 9)。トレンチ側面を目視で観察させていただいたが、地層の乱れや、荷重構造、火炎状構造、廃材などの混入、砂層、液状化跡等など、地震や巨大津波の痕跡を示唆する構造は認められなかった。

4.おわりに

現時点において入手できた大田市周辺における津波被害に関する情報をご報告した。本稿に整理したように、大田市周辺にも、万寿の大津波に関する記載があることは確認できた。しかし、記載の根拠及び、津波の高さなど、明確に記されたものはまだ未確認である。よって本報告をもって、大田市周辺に万寿の大津波が押し寄せたと捉えるのは時期尚早であろう。ただ、津波規模はさておき、万寿の津波が大田市沿岸に押し寄せた可能性については否定できない。

いずれにせよ、まずは、情報を収集しなければ、議論も始まらなければ、次の手もうてない。そういう意味で、本報告によって、さらに隠れた情報提供や、批判、今後の調査のあり方など、様々な提案や意見が湧き出てくることを強く望むところである。

自主防災が強く叫ばれる昨今、県民は、いかなる情報をもって、自分の行動を決めていけばいいのか。技術者として、真偽を追求することはもちろん大切な仕事である。しかし、こと防災に関しては、答えは明確に示せなくても、個々が各自で判断できる情報を、収集して、整理して、わかりやすく、現在のありのままを提供するという仕事も軽視できないのではないだろうか。

末筆ながら、このたびの文献、資料を提供いただいた皆様、収集に尽力いただいたすべての関係者に感謝申し上げます。